

日本仏教の諸宗派の中で、浄土真宗はいち早く、ハワイと北米において開教活動を開始し、寺院組織を構築したので、英語圏における布教活動の歴史が今に 130 年ほどに及ぼうとしている。真宗の聖教の英訳事業もほぼ同じくらい長い歴史を持っており、戦前から『歎異抄』や親鸞の和讃の英訳は、東西両本願寺の援助のもと、出版され、戦後には『教行信証』の全訳のみならず、主要な和語の著作の英訳も多数、刊行され、ついには一九九七年に *The Collected Works of Shinran*（英訳親鸞全集）は浄土真宗本願寺派から出された。

このような長い開教の歴史を持ち、英文で聖典が読まれるように努力がなされてきたが、英語圏における浄土真宗は、繁栄からほど遠い状態にある。少数の例外を除いて、日系移民のコミュニティーを中心に作られた寺院の多くは、メンバーの減少によって、開教使を常駐させるほどの財力もなく、次世代まで存続できるかどうかは不透明である。

また、禅宗やチベット仏教に比べて、北米・ハワイの一般社会における浄土真宗の知名度は至って低く、日本について関心のある教養人の間でさえ、真宗の名すら知らないことは珍しくない。

ゲーレン・アムスタッツ氏は、この知名度の低さの原因について種々の考察を加えてきた。最初は、氏はその原因を主に欧米の受け取り手に見据えたが、近年の論文では、今回の大会のテーマでもある「日本の特性」が大いに関係していると述べている。「Subjectivities, Fish Stories, Toxic Beauties: Turning the Wheel *Beyond* “Buddhism?”」(『*Pacific World*』第 19 巻、2017 年)において氏は三つの事柄が浄土真宗の英語圏における伝播を妨げていると述べている。

先ず親鸞が『教行信証』などにおいて展開されている議論が、鎌倉時代の特殊な仏教学的文化の中で、その時代の特有な聖典読解方法を用いているため、翻訳のみでは、英文読者にとっては理解不能であるとしている。そして氏はそのような親鸞の言説をその歴史的背景において十分に説明できたとしても、それは北米の一般社会における読者の問題関心に応えないと論じている。

次に氏は日本における本願寺教団の特異な歴史そのものに、仏教に関心を持つアメリカ人が嫌う要素があることを指摘している。氏は特に東西両本願寺が日本の政府が推進した近代化のみならず、全体主義へと傾倒した際にも勢力的に協力した点を挙げているが、法主信仰や教団が差別制度の構築と継続に果たした役割も言及されよう。

三番目には、氏はアメリカにおける日系移民の歴史に開教寺院がアメリカの一般社会に開かれている場になることを妨げていると論じている。

本発表において、この三つを紹介した上で、一番目の指摘に注目し、その妥当性を問う。『教行信証』の英訳本における重要な箇所を取り上げ、比較し考察することによって、氏が言うように、詳細な解説なしに『教行信証』における親鸞の議論を英語で追うことが不可能であるということを明らかにし、『教行信証』の英文解説書の作成の必要性を提唱する。そしてそのような書物は十分に英文読者の関心を捉え得ると論じ、氏の極端な結論を批判する。

キーワード：親鸞、英訳『教行信証』、浄土真宗の海外布教